

第65班ボランティア 感想文

2年R組 F. U. (春日部市立飯沼中学校出身)

石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。
あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

行く前は、テレビやネットなどからの情報しか知らず、あまり実感がありませんでした。しかし、今回実際に行ったことで「ここで実際にたくさんの方が亡くなったのだ」と実感しました。そして一人ひとりに家族がいて、亡くなった方の何倍もの人たちの悲しみがあつたのではないかと考えました。私は、この命の重さを感じながら人のためになる行動をしていきたいと思います。私に今できる最大限のことをしていきます。

「ボランティアに参加して」

私は、今回初めてボランティアに参加しました。今年の3月11日に放送されていたテレビをみました。内容は幼い息子を亡くした母親の話でした。「6年間ずっと苦しんでいる人がいる。少しでもそんな人たちの支えになりたい。」と思いました。しかし、きっかけはそれだけではありませんでした。「テレビなどでは分からないことがたくさんあるはず。自分も学べることもあるかもしれない。」そう思い、ボランティアに参加しようと思いました。

石巻市に着いて、被害にあった場所を見ると本当に家があったとは思えないほど何もなくて、基礎だけがまだ残っていました。ここで何人もの人がどんな思いをして亡くなったのか、その周りの人はどんな思いなのか私には到底分からない感情があるのだと思いました。ただ苦しいとか悲しいとか、それだけではない感情がきつとあるのだと思いました。

新聞配りをして仮設住宅の方々と触れ合うと、みなさんとても温かく「暑いのに大変だね」と飲み物をくれたり「来てくれてありがとう」と言ってくれたりしました。楽しそうにお孫さんやひ孫さんの話をする方もいれば、悲しそうに亡くなった家族の話をする人もいました。住宅の抽選がなかなか当たらず仮設住宅から出られない人もいました。どんどん周りがいなくなる中で不安やあせりを抱えている人に、私はなんて声を掛けてあげるのが正解か未だに分かりません。それでも、みなさん復興にむけて前を向いていました。私が助けに行つたつもりなのに私が助けられました。

最終日に大川小学校に行ったとき、とても苦しかったです。亡くなった人の家族や友人はもっと苦しいんだと思いました。被害に遭いそのまま残された校舎をみるとそう感じます。「生きていれば私たちと同じくらいの歳だったんだ。生きていればこの6年間とっても楽しいことがたくさんあつたのにな。」どうしても思ってしまう。「あの時こうしていれば」なんて終わったから言えることです。私たちが今考えなくてはいけないのは、同じ過ちを起さないことです。

私がこのボランティアで学んだことは、命の大切さ、前を向いて生きることの大切さ、災害の恐ろしさです。このことを、少しでも多くの人に伝えて後世に残していきたいです。2度と同じ過ちで多くの死亡者を出さないように、悲しむ人が少しでも減るように。きっと、この東日本大震災の教訓を活かすことで今後防げることもあると思います。救える命もあると思います。だから私は伝えていきます。たくさんの方に、ここで学んだことを、またいつくるか分からない恐ろしい災害に備え私ができることをしていきます。このボランティアは、私にとってとても価値のある体験になりました。

第65班ボランティア 感想文

2年R組 K. K. (鴻巣市立鴻巣西中学校出身)

石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。
あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

行く前は、まだまだ復興が進んでいなく、人も少なくさみしい感じだと思っていました。行った後感じた事は、石巻・東松島の方々には笑顔で明るい人が多いということでした。明るく受け入れていただき、すごく嬉しく、元気をあげなきゃいけないのに、自分の方が元気をもらった感じがしました。

私は、震災前に何度か東北へ行ったことがありましたが、やはりどこかさみしい感じがしました。

「ボランティアに参加して」

私はボランティアに行く前までは、「石巻は人が少なく、東松島は更地が多いのでは？」と思っていました。しかし、思っていたより人がとても多いなという印象が大きかったです。あるおじいちゃんの家を訪問したときに、「自分以外が流されてしまい、寝ているとたまに“つんつん”っと誰かに呼ばれる感じがするんだ。」と話してくれました。すごい、これが現実なんだと痛感しました。石巻の方々には笑顔と元気があり、とても優しくてすごく大好きです。石巻の方々との触れ合いは、とてもステキな時間になりました。

大川小学校で亡くなった人の年齢(墓誌)を見たとき、胸が苦しくなりました。4歳や5歳、お年寄り、そして今の私と同じ年など、本当にすごく苦しかったです。大切な家族や友達、最愛の人がもし津波で流されたとしたら？これは遺族の方にしか計り知れないことなのだと思います。

説明会のときに見せていただいた震災当時の映像も、とても衝撃的で今でも覚えています。私は、伊藤さん(元東松島市在住、現浦和学院高校事務職員)は本当に強く、すごく尊敬しています。実際に被災されている中で、石巻・東松島へ行き、変わってしまった風景を見て、どう思うのか…もし私だったら、とても無理なことだなと思いました。しかし、伊藤さんはみんなの前でも、バスの中で昔と今の比較をしながら細かく話をしてくれました。本当にすごいなと思いました。私は、今まであまり石巻・東松島のことなど考えていませんでしたが、4日間の活動を終えてから、なんとなく天気予報を見ても、東北の方も気になるようになりました。また、いつか石巻や東松島にプライベートでも行きたい！ボランティアも参加したい！と思うようになりました。私には、重い病気で声も出さず、歩くことも出来ず、ご飯を食べることや水を一滴も飲むことさえ出来なくなってしまったおじいちゃんがいます。今までは、かわいそうしか思えなかったけれど、おじいちゃんの手を見るだけで、小さな幸せなんだと気づきました。言葉を話せず、ご飯も食べられず、本当に苦しいと思うけれど、おじいちゃんの手はなくなることなく残っています。私は、お見舞いへ行くと笑顔になれ、幸せだなと思えるようになりました。今あることすべてが当たり前ではないこと、とても身に染みました。今までおじいちゃんの手が辛くてお見舞いに行くのも嫌だなんて思ってしまったときが何回かありましたが、私の考えが変わったのも、今回のボランティアのおかげです。本当にありがとうございました。

石巻へ行って、もうひとつ学んだことがあります。それは「感謝の気持ち」です。新聞を配ると「ありがとう」「お疲れ様」などたくさん声をかけていただき、疲れなど全然感じず、時間の経過がとてもあっという間に感じました。どんな時でも前向きに進んでいく姿勢を学ぶことができました。これからは、明るく元気に笑顔で毎日頑張りたいです！そして小さな幸せに感謝していきます。

4日間、本当にありがとうございました。お金では買うことのできないステキな思い出になりました。

第65班ボランティア 感想文

2年W組 I. K. (松戸市立栗ヶ沢中学校出身)

石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。
あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

復興の度合いはもちろん、それ以上に感じたことが「ありがとう」という言葉の重みの違いに驚きました。あんなにも心に響く「感謝の気持ち」は普通の人では無理でしょう。被災しているからこそ思う「感謝」の重みを感じ、これから自分もそういった人の気持ちも考えながらありがとうと伝えたいです。

「ボランティアに参加して」

自分はこのボランティアに参加して大きく成長できたと思います。テレビや新聞などでは決して伝わることのない被災地の現状や、仮設住宅の方々の震災当時の話を聞くことができ素晴らしい体験、経験を積むことができました。実際、仮設住宅に住む方々の話をしてくれる姿に感動しました！！イメージでは、家族を失って暗い方が多そうな感じでしたが、実際のところ笑顔で明るく当時あったことを忘れてしまうくらいみんな元気で、逆に自分はその姿にパワーをもらいました。あれから6年経ち、今までに見てきた資料映像や風景などは大きく異なっているなあと思いました。数件の家が、崩壊した震災当時のままで残念な気持ちと、それらを見て何度も立ちすくんでしまいました。それ以外は、きれいなアパートや復興住宅、土で盛られている土地、マンションなど復興状況を見ることができ、言葉では表せないくらい感動しました。しかし、何度も抽選に落ちてしまい、そういった家に住めない方がいると思うと悲しくなっていました。

大川小学校での説明や体験では「死ぬ」とはどういう意味か「生きる」とはどういう意味か身に染みて感じられました。山の方からも波が来て、渡り橋の所で渦を巻いた津波、山の方へかけ上がっていく子供の姿、自分は体験していませんが、フラッシュバックした気がしました。そしてあの校庭は同じ石巻でも何かが違い、空気も他の場所とは違うことがバスを降りた瞬間に感じました。この感覚は、一番初めに行った「がんばろう石巻」の看板の場所でも感じました。この違いは、実際行ってみないと分からないこと、また僕がみんなに伝えたところで分からないと思うので、あそこは「何か違うよ」とだけ伝えました。本当にいい体験が出来ました。

そして自分の中ではあることが明確になりました。それは将来の夢「看護師」に必ずなるということです。「恩返しをする」というのも一つの目的でしたが、これを果たすことができたと思っています。これは人生の大きな通過点にすぎないことですが、被災地、被災地の方々は自分にいい物、大きな物を与えてくれた素晴らしい出会いだなと思い、こういった影響を与えてくれた方々に感謝の気持ちを忘れず、今後の人生にいかしていきたいです。そして石巻、東松島という場所はこれらの気持ちを思い出させてくれる素晴らしい場所なので、またボランティアに参加したいです！！そしてこのボランティアで自分と関わったすべての方にお礼がしたいです。これ以上ない経験を浦学はしてくれるので本当に感謝しています。

第65班ボランティア 感想文

1年L組 M. I. (三郷市立瑞穂中学校出身)

石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。
あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

行く前は、かわいそうなど下向きな印象でした。行ってからは、被災者の方々は強いと思いました。絶対につらい思いをしているのにお互い頑張りましょうと言ってくれた時、なぜこんな事を言ってくくださるのか分かりませんでした。しかし、よくよく考えてみると6年が経ちみなさん前へ向いているんだなと思いました。

「ボランティアに参加して」

ボランティアに参加して感じたことは、たくさんあります。その中でも特に感じた事3つを紹介します。

1つ目は、被災者の方々がどれだけ強いからです。きずな新聞を配布している時、住民さんと話をしました。震災の事を思い出したり、話すだけでもつらいと思うのに、私たちに色々な事を話してくれました。ある住民さんには「いつも新聞配布ありがとうございます。暑いから熱中症には気をつけてお互い頑張りましょう。」と言っていたき、とても心に響きました。震災から6年経過したとはいえ、震災でおった傷は消えないと思います。それでも、住民さん方は前に進もうとしている事がとても印象に残りました。

2つ目は、震災のおそろしさです。住民さんに震災の事を聞いたり、ビデオを見たり、東松島市震災復興伝承館のスタッフの方に旧野蒜駅周辺の話しを聞いたりしました。「あの日家にいたまま出かけていなかったら助からなかった」「津波すごく流された」「家族が亡くなってしまった」など現地に行かないと分からなかった事をたくさん知ることが出来ました。もし震災がおきた時のために、ずっと備えておいた非常食などもいざというときは持っていけないことも教えてくれました。それくらい震災はおそろしいんだなと感じました。

3つ目は、自分の生活がどれだけ贅沢だったのかが分かりました。ボランティア中、仮設住宅を見て隣の家との距離がとても近く、物音もすごく聞こえてしまうと思いました。また、前に住んでいた家よりも狭いと思うのに「仮設住宅で困った事が無い」と言っていたことがすごいと思いました。また宿泊先では避難した時の事を考え、クーラーのない部屋で寝袋を利用して寝ました。私は今までベッドの上でクーラーを付けて寝るのが当たり前だと思っていましたが、今のこの生活を当たり前と思っはいけないと思いました。そして、これからの生活では、今あるすべてが当たり前と思わずに1つひとつ感謝して生活していきます。

このボランティアで感じた事、知れた事は絶対に忘れる事はないので、家族や友達などにたくさんお話をし、多くの事を知ってもらいたいです。

私がこれからしていきたいことは、ボランティアを続けていくことです。小さなお手伝いでも、ボランティア。今の九州などに行き今回のような活動をするのもボランティアなので、何か1つでも多く人の助けになるような事をしていきたいと思っています。今後考えて生活していきます。先生方も、たくさんの良い経験をさせていただきありがとうございました。